

昭和二十七年四月十五日 発行(毎月一回・十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

(通第三十七号)

目

人類救済の曙光……………花田正夫(1)

人生の帰趣と現実……………白井成允(7)

次

聞光抄(冬日)……………清水清吉(12)

慈光

第四卷 第四號

八、佛陀の接見

善友耆婆の信力と善巧に導かれて、阿闍世は遂に佛所に到り、サラソウ樹の間を通つて、御弟子達に圍繞せられ給う御佛の前に進み、相好いともすぐれ給うて金山の如く輝きまします佛陀の尊容を拜し奉つた。

その時世尊は微妙和雅の御声で「大王」と喚び給うた。すると阿闍世王は左右をかへり見て、この大衆の中に誰か大王らしい人が居るであらうかと探した、それと言ふのも、王はすでに大逆を犯して王としての福德はすべて失つてゐるから、佛陀が大王と喚び給ふはづがないと深く心に思ひ込んでゐたからである。

私は阿闍世のこの心事に、胸うたれ心つまされて来る。佛陀はすでに王の爲に月愛三昧の光を被らしめ、また王の断ち難い疑惑を必ず断ち得るとの大決定心を持たれ、更に阿闍世の爲に涅槃に入らずとの無窮の大悲に溢れてゐられる、その佛陀御自らがまのあたり「大王」と喚びかけ給うたのである。それなのに右顧左眄して我がごとと受け取り得ない阿闍

世の心、この王の心事こそ、我等煩惱具足の凡夫、罪業深重の者のどうともして見やうのない姿である。

佛陀は罪障に固く塞ぎされた阿闍世をことに憐み給ひ、金口再び開かれて「阿闍世大王」と喚び給うた。晴天の霹靂、ハット驚いた王は、佛陀の慈眼を仰ぎ奉つた刹那に、佛陀の不思議の廣大無辺な御徳に打たれて、王の心は全く佛心に融け込んで了うた。

やがて王は感涙にむせびながら「世尊よ、世尊は私如き大悪人をなほ大王と愛言して下さいました。私は今始めて、佛陀はあらゆる衆生に大悲憐憫ひとしうして更に差別のましまさぬことを知りました、私の疑心は永く消除いたしました。世尊は眞に一切衆生を導いて下さる無上の大導師でましますと御礼を申してゐる。

暗雲を排して明月が光を放つに似て、大悲憐憫ひとしくして更に差別なき佛心が「阿闍世大王」との一言によつて王の身心に徹したのである。距て心のやまぬ、疑網断ち難い、その故に恐怖と焦慮のはてしなく繰り返される者、その者を

こそ廣大無辺な佛陀矜哀の大悲が注がれるのである。

それが徹し来つて洞然として疑心ながく断たれたのである。ここに西岸上の彌陀招喚の御声が聞える。「汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん」と。それなのに我等疑網に覆はれて右顧左眄を繰り返してやまぬのである。「汝」とは個有名詞の「花田」である。疑網如何とも爲し難い私一人を目標に向ふから喚びます悲心である。

聖人が総序の文に「行に迷ひ、信に惑ひ、心くらく、さとりすくなく、悪重く、障り多きもの、特に如来の發遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に歸して、専ら斯の行につかへ、唯斯の信をあがめよ」と全身全靈をこめられた御勸化を述べられてゐる。これ疑心去り難く、悪重く障り多き者の故に、特に、必ず、専ら、唯と言語の限りを尽くされての悲引である、

王は更に佛陀に言上する

「世尊よ、たとひ私が天上界に生れて諸天と共に楽しみを同じくし得たといつても、その喜びは物の数ではありませぬ。佛陀の眞実の一言に接し得た慶びは何ものにもかへ難い深い欣びであります」と

と隨喜し、信順の色は外に現れて、種々の宝物を供養し、佛足を礼し佛前に拜跪して再びもとの坐についた。

大王とは人間としての最上の位である。阿闍世は王位を貪して父王殺害の拳にまで出たのであるが、さて王位に即いて

見れば更に天上界の樂を願つたのであらう。斯うしたことが無限の欲求を持つ我等のはてしなく夢を追ふ姿である。さて王は佛陀の無限の大悲に遭ひ奉つて、最早さうした願の空しさを知れ、唯佛の御眞実一つをこよない宝として隨喜讚仰しまゐらせたのである。この王の言葉の中に我等が人界に生れ出た最も大切な問題を教へられる。即ち佛陀の久遠のまことを聞きひらくか、聞きもらすかによつて、人生の全体が醉生夢死に終るか否かの一大事が存することを知らされるのである。

九、佛陀の慈誠

阿闍世の心やうやくひらけて佛前に靜かに坐した時、佛陀の慈誠が説かれる

「大王、今まさに汝の爲に正法の要を説くべし、汝まさに心を一つにして諦かに聽け。凡夫は常に心にかけて身に二十事あることを觀ぜよ」

斯くて凡夫の二十事を説かれる。

- 一、我が身中は空にして煩惱に濁りきつてゐる
- 二、善根は何一つ無い身である
- 三、我が生死の苦は未だにすこしも調へられてゐない
- 四、深い坑に墮ちこんでゐて到る処に畏れがみちてゐる
- 五、眞実の智慧がないからどうして見ても佛性を見ることが出来ない
- 六、心は常に乱れさはいでやむ時もなく、妄念に閉ざされて

るて、眞如の月を仰ぐ由もない

七、四苦八苦みちみちて居て常に苦に沈み、無常と苦と空で頼むべきものは何一つとしてない

八、愚痴に覆はれ、瞋恚に狂ひ、貪欲に迷うて、健康にほこり、たまゆらの快樂に溺れ、要領よく世渡りをして得々とし、又は身体に故障がありなどして、佛の在世の時にさへ道を求め、それを修し、眞の法樂を願ふことをしな

九、恒に怨みを持つ者につきまとはれてゐる

一〇、種々の迷ひから解脱する一法をも持たぬ

一一、三惡道の因ばかり造つて、そこから逃れ出ることが出来ない

一二、惡といふ惡、邪見といふ邪見は総て身にそなへて余すところがない

一三、常に五逆の罪を造つて居りながらどうして救はれ得るかの道も知らない

一四、生れかはり死にかはり迷ひに迷うて尽未來際つきまるとがな

一五、すこしの修行もやらないから得るべき果報もない

一六、自分が作つた業は自分が受けるので代つてくれる人はない

一七、樂の果のみ求めてゐるが樂の因を造らうとはしない

一八、如何なる業も必ずその実を結んで来る

一九、煩悩に眼さへられて、闇から闇へと生死流転を続ける

姿を否定する者は、永遠に自己の姿を見ることは出来ない。

佛陀はここに懇ろに凡夫の二十事を説かれたのである。

阿闍世王は佛の最初の教誡にあひ

「世尊よ、私は昔からこの凡夫の姿を聞いたことも観じたこともありません。そのために多くの罪を造つて参りました。三惡道の外行き場の無い者であります。もつと早くこのことをお聞きして居りましたら無罪の父王を殺すといふこともしませんでした。嗚呼然しすでに大逆を犯して了りました、必ず無間知獄に墮ちねばなりません」

これが阿闍世王の凡夫二十事の領解である、そこには無窮流転が身の定めと知らされる。

十、無窮の佛慈

佛陀の大慈に浴して踊躍した王は、愈々我身の実相、機の眞實を佛智によつて明かに照らされて、ただ崩折れて懺悔するばかりである。日輪の光に夜の闇が去り、闇が去るから山河や平原、細道も屠家も、地上にありとしある一切の姿がそのままに浮び出る、そこに無限の懺悔があり、そのまんなかに佛心の大慈に攝め取られる。

佛陀はここに王が最も悲しみ苦とする大逆の問題の核心を衝いて慈悲を垂れ給うた

「大王、今無罪の父王を殺害したので必ず地獄に墮すると歎いてゐられるが、成る程親殺しの罪は重い。然し同じ親殺

一二〇、無智の凡夫の常として、過ぎし日も今日も来む日も、常に放逸に流れて、人生は空しく去つて行く。

これが佛陀の御眼に写つた凡夫の苦相である、佛は先づそれを挙げ玉うて、更に

「大王、先づ凡夫はこの二十事を我が姿であると知らねばならぬ。このことが諦らかに観ぜられると、生死の苦の逃れ難く断ち難きを知り、然もその原因は自業自得であると知り、漸次に心も定まつて眞實の智慧も生れ、乱行もおさまり始めるが、この事をよく観ぜなければ、心は何時まで浮調子になり、どんな惡をも残らず造るであらう」と誠められた。

道に入る最初の門は先づ自己を知ることである。譬へば東京に行くにしても自分の居場所が定まらねば行くべき方向も決定しない。方向が決定しても更に飛行機にするか自動車にするか汽車に定めるかは現在の自分の財力が問題である。このことは誰も知り抜いてゐるが、それが伸々出来ないのである。「鏡は鏡自身を写し得ず、刀は刀自身を切ることは出来ぬやうに、如何なる智者も身辺三尺は闇暗である」とは佛陀の金言である。一体どうしたらよいのであらうか、それは完全円満な鏡に照らされる外はない、即ち煩惱の浪寂かに滅し無我の境涯にまします佛陀の御眼によつて始めて我等凡夫の実相が明々白々に写るのである。この佛智の鏡に写る我等の

し罪でもそこに軽重がある。王は自ら手にかけて殺したのでもなく、直接に殺せと命じたのでもない、唯心に父の死を念じ、食を絶ち足を削れと命じたのであるから軽い罪である。」

佛陀は現に重罪に泣く者の心中を心にくいまでに洞察せられた悲語を述べ給うた。俗に言ふ「盗人に三分の理」と。その三分の理のかゆい所に手のとどく洞察である。阿闍世としては全く返す言葉もなく唯おそれ入るばかりであつた。同体の大慈者ならでは濡れ得ない悲語である。

佛陀は更に語を励まされて

「大王、王に若し罪あれば諸佛も亦罪がある。若し父王が諸佛に供養しなければ王としての福德も得られなかつた、従つて大王が王位を食する心もおこらず、殺害することも無かつたであらう、だから大王が地獄に墮するのであれば諸佛も亦地獄に墮するであらう」

一切群生の罪業を一身に荷負せられる佛陀の大慈悲心の光被である。前の凡夫二十事においては、自業自得で誰も代る者は無いと説かれてゐるが、斯く説かれる所以は、その故にこそ佛ひとりその罪業の一切を荷負して尽く消滅せんとする密意がある。嗚呼何たる廣大無辺の大慈であらうか。如何に罪業深き者もその一切を知り尽くされての上に、飽迄も同情の

涙を注いで下さる方の心に遭へば、闇の心も夜明けする、唯一人で充分である、佛陀は現に其の人である。阿闍世は唯々感涙にむせぶばかりであつた。

佛陀は更に語を継がれて

「大王は父王に罪無しと言つて居られるが、父王が昔狩獵に行かれた時、誤つて一人の仙人を殺害せられたことがあつた、そのことは父王から直々聞いてよく知つてゐるが、その罪の報いを現にうけられたのである。人生の出来事で、此方ばかり善くて相手が悪く悪いといふことも、相手ばかりが善くて此方が全然悪いといふ様なことも金輪際あり得ぬことである。共に是れ凡夫のみである、此方にも罪があるが相手に亦罪が存在する」

これ罪業の凡夫の織り作して行く全体の虚偽さを説き示されて、佛陀としては父王の罪障をよく知られて之を憐み、殺害の罪に泣く阿闍世をも憫まれてゐる。

このことは非常に大切なことと信ずる。世間によく継親継子と聞くと常に継親を鬼の如く想像し、継子に無暗に同情する、これは大きな偏執である。人生萬事が五分と五分である。嘗て大伽葉尊者が貧者のみに托鉢して居た時維摩居士は大喝して、「佛の大悲は貧者のみに非ず、富者をも慈しみ給ふ、汝平等心を缺く」と叱してゐる。

我等偏執の輩は何か事が起ると善悪を勝手に定めて、自分の善しと思ふ方に味方し、悪しと思ふ方を責めるのが常であるしと知らしめて、その一切が佛陀の真実心に満たされて行く、さすがに治すべき人なしと悲歎した阿闍世の重罪も、佛心に攝められてほのほのとした曙光を仰ぐのである。

十一、阿闍世の歡喜

阿闍世の疑網はすでに断たれ、心垢また消除せられ、満身ただ欲びにあふれて、つつしんで佛陀に言上する。

「世尊、私はかつて佛は常に衆生の父母であると聞きましたが、今が今までそれを信じ得ませんでした。

又須彌山王は金・銀・瑠璃・頗梨の四宝で作られてゐて、衆鳥がその山にとまると、自然に同じ宝の色に染められて行くと聞きました。今や佛陀に近づく者は佛徳に自然に感化せられて佛心に同ぜしめられることを明らかに知りました。

又世間に惡臭放つ伊蘭の種子から芳香たぐひない栴檀香木が生じるのを見たことがありません、然るに今それを見ました。人を狂人にする程の惡臭をもつ伊蘭樹とは我が身でありませぬ。栴檀の双葉が出ると四十里に渡る伊蘭の林の惡臭をたちどころに消すとききますがその栴檀の双葉とは私の心に生じた無根の信であります。無根とは私は未だかつて佛も信ぜず、法も尊ばぬ身でありました、唯煩惱に狂うて惡臭ばかり放つ身であります。若しかかる私が佛陀矜哀の大悲に浴することになかつたら一体どうなつたことでありませうか。

幸にも佛陀にお遭ひ出来まして、惡業煩惱の胸も久遠の黎明にあひ得ました。この不可思議な佛の威神力は必ず一切の

るが、それでは一角同情してゐる積りで、実は火事場に油を注ぐやうなことで実にひどい話である。互に争ひ合ふ敵をも照し、また味方をも照すのが太陽の如き佛陀の光明である。

佛陀は最後に阿闍世の病源を示される。

「大王、衆生の狂惑に四種あるが、その狂人の惡を作るのを見て人々はその罪を責めずむしろ憐みを持つてあろう。大王は貪欲の煩惱に狂はされて逆惡を犯したのであるが、佛としてはむしろ父王さへも殺さずに居られない程までに熾烈な貪欲の煩惱に狂はされた、全く本心を失つて作つた罪を憐れにこそ思へ微塵も責める心はない。

大王は大逆を犯したことを悔い悲しんでゐるが、それは罪に実体あるかに思ひ込んでゐるからである。凡夫の言ふ善惡は皆妄念を根とした幻影にすぎない。譬へば鏡に写る面像を見て愚者はそこに人が実在するかに思ふが、智者は影にすぎぬと知り、幻師が種々な色や形を現はすと愚者はそれを実の如く思ひ、智者は幻術にすぎぬと知つてゐる様なものである。世間のありとしあらゆるものは皆無常であり、苦であり、空である、それを何か実在するかに思ひ込むところに迷ひがある。云々」

嗚呼、光顔魏々として輝やき、威神極りなく照りそふところ、日月の光は失はれて了ふ。佛陀の慧見と大悲は、善に執じ、惡に着する一切を、そらごとたわごと、まことあること迷ひの衆生の闇を破つて一切の志願を満ち足らはして下さることと確信いたします」

佛陀は阿闍世の心ひらけて信心歡喜する姿をみなはされ

「善い哉、善い哉、実に大王は、佛の大慈大悲の不可思議力は大罪人極惡人の悪しき心を破壊し得ることを深く味ひ、よくも信証したことである。これは大王のみの罪が滅びたのではない、未來の惡業煩惱の一切の衆生が助かる先達をせられたのである。」

と印可讚嘆せられると、王は感極まつて

「世尊よ、何たる有難いことでありませうか。今遭ひ得ました佛陀の大慈悲力で一切衆生の惡心が破壊せられますならば、私はたとひ無間地獄に墮在して無量劫の間、諸の衆生のために大苦惱を受けましても、苦といはしませぬ」と言上する。

私はここに親鸞聖人の「たとひ法然上人にすかされまらせて、念佛して地獄におちたりとも更に後悔すべからず候」の表白に想到する。いづれの行も及び難き身、地獄は一定住み家と自照せられた聖人が、「ただ念佛して彌陀にたすけまらるすべし」の本願真実のまことに触れ、生涯を通じての隨喜讚仰の声となつた。全く阿闍世王の告白と符合一致するものである。又阿闍世王と聖人の告白の根源に「たとひ身を諸の苦毒の中におくとも、我が行は精進にして忍んで終に悔

いざらん」の法藏菩薩の志願を仰ぐ恰も海辺に立つて山の端を出る太陽を仰ぐ時、その陽光が千波萬波に照り輝いて我が足下にまで徹到する不可思議な願心の莊嚴を感佩す。

阿闍世救済の事實は、唯僅かの歴史上の一事実でなく、生ける信仰上の一大事實である。人類救済の曙光である。最後に阿闍世王の隨喜の余り口をついで溢れた佛徳讚歎の偈文を掲

人生の歸趣と現實（承前）

白井成允

本願は実在するかとよく尋ねられるが、これはどうお答へしてよいのでせうか。善導大師の散善義に「人に就いて信を立てる」と「法に就いて信を立てる」と二つの道を示されてゐるが「人に就いて」といふのは法と人が一つになつてゐる。阿含經に次のやうなことを佛は説かれてゐる。

ヅカリーが病床についてゐる、そこへ釈尊が見舞に行かれる。ヅカリーは非常に敏んで「私は佛にお目にかかり度いと思つてゐましたが、病氣で淋しく思つてゐましたのに、今日御見舞頂いてこんな嬉しいことはありません」と申し上げると、釈尊は「会へないからといつて悲しまなくてもよい。何時も私の側に居ても私を見ない者もある。居なくても私を見てゐる者もある。私を見るものは法を見る、法を見るものは私を見るのだ。だから私の居所から離れて、私のこの身体を

△

ける。

如来は一切の爲に、常に慈父母となりたまへり
まさに知るべし、諸の衆生は、皆これ如来の子なり
世尊の大慈悲、衆の爲に苦行を修したまふこと
人の鬼魅にくるはされて、狂亂の所爲多きがごとし。

彼岸の中日 稿了

見てゐなくても、諸佛の法を覺つてゐればよいではないか」と答へられてゐる。自分を見れば諸佛の法を見て居ることであり、法を見ることは私を見ることであると云つてゐられます。こんな人法一如の境地に住して居られることを何か強いて云はれるのでなく、淡々として日常の会話の中に自然に云つてをられる。ここに何か大きな釈尊の信念に触れる。是れ釈尊といふ人に就いて佛の法に対する信を立てるのであります。涅槃經の中に「道ありと信じながら、得道の人を信ぜず、故に信不具足なり」とありますが、法のあることは知つてゐるが、それを証された人のあるのを知らない、それでは信不具足である。その道を証された人のあることを知つてゐることが、信不具足の姿であると述べられてゐる。道あると共に道を証した人がある、ここに信心確立の消息がある。

今日の始めに善知識によつて教が伝へられてくると申しましたが、これと同じであつて、親鸞聖人の「たとひ法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」と申してゐられる。惠信尼公の手紙によれば、生死出づべき道は、ただ法然上人の仰せにしたがひてまいるばかりであるから、たとひ惡道におちると人々がどんなに云つても、ただ上人のまいらせられるところにまいる」とありましたが、法然上人は道そのものを現はしてゐられて、道に住してゐられるのだと親鸞聖人はしみじみと味へて来たのでせう、ここに人に就いて信を立てるといふ消息がある。

「法に就いて信を立てる」とは、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と申してゐるところに、自然に信心がひらけて来る。先程一度申しました菅瀨芳英師は大声で朗らかな念佛を申される方でありましたが、先程お話し申したあの時、私共へあゝいふ教を告げて下されたすぐ後に、お遺骨の前に奥様とお母様とがひざまづいてしきりに泣いてゐられる姿をじつと見られて「泣きなさい、泣きなさい。泣くより他にどうも出来ないし泣けばすこしでも慰められるでせう、泣きなさい、泣き明しなさい」

と申してお念佛してをられたが、すぐまた

「が然し、今は泣かずにをられまいが、暫らくたつと、もう涙が出ない時が来る」

と申された。それを聞いて、私は残酷なことを言ふ坊さんだと思ひましたが、師は引き續いて

「あなたがたの涙はかほとも、親様の涙はかほと時はないから、その親様の涙を思つてお念佛申しなさい。さう云ふとすぐに、自分たちの申す念佛は自力の念佛だからいけない、他力の念佛でなければなどと云ひだすだらうが、お念佛申してゐると始めは自分の念佛だと思つてゐても、つひには親様の念佛が徹つて来て下さつて、みんな他力の念佛と知られてくるのだからお念佛申しなさい」

と言はれ、誠に徹底したお話であると今尙ほ心に残つて居ります。このやうに法を聞くといふことが誠に大事なことである。かねて聞いてゐた法と自分の事件が触れ合つて火花が散るのであります。妻子や親子と別れねばならぬ時が来て、不断に佛法を聞いてゐると、人間の生活はかう云ふことがあつたかと思はれて来ます。それには法を聞くことが大切で、無自覚に過して了ふことが法によつて法の世界に転ぜしめられて行きます。ここに法に就いて信を立てることが親はれて来ます。

此の如く人に就いて、又法に就いて信を立てさせていただけ、その信心の内容はどうでありませうか。機と法の二種の深信として告げられます。

先づ「そくばくの業を持ちける身にありける」とであり「とても地獄は一定すみか」と知らされることであります。これを機の深信と申されます。これは單なる罪惡感ではありません。西洋の宗教でも罪惡観が説かれて居ります。トルス

トイの如きは良心の鋭敏な人ですから、深刻な罪惡観に悩める事をよく告白してゐますが、良心に基づく罪惡感には救ひがありません。

善導大師の「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流転して出離の縁あることなし」と云はるる如きが眞の機の深信であります。其は法の深信と一心のものので永遠に救はれてゐる声であります。私共にあてはめますと、たとへば自分の師匠の教語を聞くに當りて、今日こそは眞面目に聞かねばならぬと思つてゐても、今日も亦ほんやりとした、眠くなつた、雑念が混つて来たとかで信心が獲られない、どうしても安心が出来ないと煩悶する。眞面目にならう、不眞面目ではいけない、と嫌ひ乍ら、不眞面目になつて了ふ、かう云ふ状態を繰り返してゐるのでは、罪惡観に止まるので救はれてゐるのではなく、苦しいばかりである。煩悶状態である。さう言ふ状態の時は、不眞面目でもかまはないのではない、どうしても眞面目になりたいのである。然し眞面目になれない。それで苦しみ抜き乍ら、自分は不眞面目であると言ひ乍らも、眞面目にならうとしてゐる。本當に不眞面目に徹したのであれば眞面目にならうとするとは出来ないのが道理であるが、さうは思はれない。不眞面目がここでは徹底してゐるのではない。

ところが「お前は眞面目にならうと苦心し努力してゐるが、それはなり得ないのだ」と向ふの方から言うて下さる。佛の智慧でみえなはしてさう云つて下さる。こちらは不眞面目で来るのであります。法の深信と機の深信とは分つことの出来ないことで、一枚の紙の表裏に相当します。一つの信心の内容でありませう。機の深信は單なる罪惡観と異つて、煩悶状態ではありません、佛の心に攝められて安らうてゐるのであります。

さて歎異抄を読ませて貰ひますといくつかの問題が起つて参りますが、不眞面目なさまを救ふといふことを聞き違へて、悪くてもかまはないのだと思つてはいけない、そして道徳を顧みないといふやうなことになつてはならない。「悪い者を救ふ」ことを、「悪くてもかまはない」といふことと取り違へて行く。ここに眞宗の教團が罹る怖い病の因が潜んでゐる。悪くてもよいのであれば親鸞上人の教をきかなくてもよいのでせう。悪くても構はないのなら佛の教を頂かなくてもよいのであります。

不眞面目でもよいのではなく、それでは困るのであるから佛の御苦勞があるのでありませう。かう申せば微妙な言葉の戯れがあるやうにも思へますが、まあ、不眞面目なものを黙つて、よいとして済まされぬところに、親の願が起るのであります。子が病に罹つてゐる、その病は久遠劫来の痼疾である。だから親様が苦しんでおいでになる。親の生命を堵げものにして健康にかへさなくてはならないと誓はれるのであります。

それかと云つて、聞いたから直ちに不眞面目が眞面目にな

目を自覚するのでもない。唯佛の方で「汝は不眞面目な凡夫である。それが昨日や今日のことではない、久遠劫来のことと眞面目になれないのが汝の本性である」と云つて下さる。「かく汝の本性を見たからには、私の生命にかけても救はずばおられない、私はそのために佛の覺をひらいて汝を救ふのだ」と。こちらが氣着かない以前に氣着かれて、それを不斷に思つてゐる向ふの方から言つて下さる。ここに法の深信がある。

罪惡観には不眞面目であると言つてゐても眞面目にならうとする不徹底さがあるが、さうでなくて「佛かねてしろし召して」、「汝は如何にも眞面目になりたいであらうが、それが出来ぬのだ」と呼びかけて下さる、不眞面目な私を不眞面目な私と言つて下さる。この佛の心を聞かせて貰ふと始めて自分の不眞面目に氣づかせて貰ふと申しませうか、徹底すると申しませうか、不眞面目でしかあり得ない自分が佛の慈悲の中に抱かれてゐるのであつて、この不眞面目な自分が眞面目にならうとしてゐることが、身の程を知らぬ傲慢の姿であると知らせ貰ふと、佛の慈悲がおのづから包んで下さる。眞面目になることの出来ない私をみえなはして呼んで下さるのだから、焦りがなくなり、焦つてゐたことが如何にも傲慢であつたと知らされて来る。これが佛の攝取といふことであります。

佛の呼び声を聞かない前は、罪惡観に苦しむのであります。聞かせて頂くと、法の深信の中に、機の深信が照し出さるとは限らない、矢張り業報のままに出て来る、不眞面目な心が起つて来て、さきの眞面目な心が覆へされて行く、流転して行くのであるが、そこに宿業の果報として現れてくる姿に、かねてしろし召して誓ひたまふたみ佛の慈悲を聞くのであつて、自分が不眞面目であつてよいとか、いけないとか、なげやりにするとか、努力するとかでは無い。佛のお慈悲を聞かせて貰ふと自分の小さい眞面目、不眞面目が、親の大きな慈悲に融かされてゆく。かう融かされてくる処に、自分の底知れぬ不眞面目が知られてくると共に、その不眞面目な自分が、いつのまにか大悲の親様の願ひとせざるを得ない不思議が生じてきます。例へば法藏菩薩の四十八願の第一が「地獄・餓鬼・畜生の三惡道をなくしたい」との願であると、佛の心を聞くと、おのづから此の同じ願が子の願として出て来るのであります。然しかう云ふとすぐに「外に賢善精進の相を現はす」私のしつこい性格が表はれてまいるのを抑へることもできないのですが、よき心のおこるも、あしき心のおこるも業報の事として、結局ただ親様の願を証させていただくばかりであります。

今日の題に「人生の婦趣と現実」と出しておきましたが、人生の婦趣は、何のために生きるべきであるかを問題として問はねばなりません。先に申しました様に、あさましさ量り知られぬ私共の姿をみえなはして必ず救ふとお呼びくださる佛の願「欲生我國」と我が國に生れよと呼び招いて下さる

佛の御願を聞くままにこの問題が解決されるのであります。池山先生の色紙がこの会館に掲げられてあります。彌陀佛の「汝一心正念にして直ちに來れ」との仰せを「オネガヒダカラ、スグキテオクレヨ」と意訳されてあります。この慈悲あふるるみ声で喚んで下さるのであります。この呼び声を聞いて現実の人生を牽けて辿りつく、何時どうなつても親の淨土に連れていつて下さる。病でも、死でも、愛別でも、その不幸が御縁となつて淨土に安らはせて頂くのであります。親に別れ、妻に別れて悲しみの心に沈み、或は瞋恚の焔に転じ、或は愚痴の淵にたたまみなどして、地獄・餓鬼・畜生の世界におちて行くのが私達の有様であります。そこを「オネガヒダガラ、スグキテオクレヨ」と仰せられる。誓願一佛乗とて、善人も悪人も、老人も子供も、佛の乗りものにのせられて救はれて行く、同一の乗りものに乗せられて行くのであります。

聖徳太子は日本国民すべてを末かけて悉く一佛乘に乗らしめようと御苦勞して下さつたのであります。親鸞聖人は太子の御心を証し給うてその同一佛乘に乗ることは私共の力の能くする所ではなくして、ただ親様の、彌陀佛の誓願一つにあるのだと示し、一切人生の帰趣は、ただこれ誓願一佛乘にあるのだと教へられたのであります。

これで一往話を終らせて頂きます、靜かにお聞き下さいまして有難、御座いました。

昭和二十六年、七月二十八日 筆録

聞 光 抄 (冬日)

宇宙萬物、冬を待つ支度に怠りがない。木々の梢は、葉を悉く散り尽くして、裸の肌を現はした。今まで鬱蒼として時を得顔に木を覆い、光をさへぎつてゐた木の葉、今や地上にそのすべてを脱ぎ捨てた裸身の樹木は、満身に思ひもよらぬ美しい月の光を浴びた。

裸身、さうだ、心の裸身。それこそ早くから私の求めても求めても得られずに悩んだ世界だ、だが、木は、すなほに葉をつけてゐるまま、日光を充分に受けてゐる間に、いつの間にもやも葉が散り初めて、自然に裸になつてしまつたのだ。美しい月の光を浴びて、覆いなきを恥ぢず、悲しまず、儼然として立つ、その姿の尊さよ。

冬來るとも朔風何かせん、吹雪何かあらんと、金剛不壞の信心に立たれし、古の聖者の思靜かなる如くに、晩秋の贈る私への賜として、この冬木の姿は全く有難く拜まれる。

私は遠い深いお話を求める前に、先づ現実の私が生きる道を聞きたい。すぐ妥協したがる。そしてすぐ誤聞かしたくなる、この毎

御一代聞書抄

一〇九三
いたりてかたきは石なり、いたりてやはらかなるは水なり。水よく石を穿つ、心源もし徹しなば、菩提の覺道、何事が成ぜざらんといへる古き詞あり。いかに不信なりとも聽聞を心にいれまうさば、御慈悲にて候間、信を得べきなり。只佛法は聽聞にきはまることなりと云云。

徒然草

かしこけなる人も、人の上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふことはありあるべからず。さればおのれを知るを、物知れる人といふべし。

あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。

※ ※ ※

清 水 清 吉

日の私の生活を、いかに清算すればよいのか。いろいろと立派な教を見聞するけれども、しかし雜念、妄想が、毎日毎日どんどん次ぎ次ぎに湧いて来て、自分の手の届きさうな教は一つもない、淋しい。

「健康第一」の標語を見れば、持病持ちで、いくら病院歩きをし、薬を水のやうに浴びても癒えぬ自分としては、これぐらゐ無慈悲な言葉はない。それは、健康な人や、健康になり得る人にとつては、音楽のやうに快く響くかも知れぬが、到底健康に縁のない私にとつては、実に無慈悲で冷酷な言葉と響くばかりだ。

「金がなければ、首のないのに劣る」との言葉もまた前同様に考へられる。要するに、健康になる道、金持になる道、人格向上の道がいくらあつても、この現実の私にとつては、それは全く縁の遠いことだ。今、幸にして、この私の姿をとつくの昔に見透かされて起された佛様のみ教を信することによつて、淋しいままに明るい生活をさせて頂くことは、何ものにもかへられぬ有難いことだ。

他人様から責任をなすりつけられると、たまらなく重くつらい。しかし、当然自分の責任だと明瞭にさせて頂いて背負ふときには、どんなに重い責任でも、一向に重く感じない。

どんなに重い責任でも、充分に背負ふ力を頂くことが、即ち信仰生活だと信ずる。

この無常の世にあつて、今日一日を真実に生き抜かなければ、またいつの世にか無量寿の生命を得ることが出来よう。過去は既に過ぎ去つた夢の跡、どうして再び逢ふことを得よう。そして未来は、いまだ来らず、また必ず来るとも限らない。

この最も確実な「今」を措いて、果して何時の時にか道を求めることが出来よう。古聖の曰く「朝に道を聞いて、夕べに死すとも可なり」と。急ぎてもなほ急がまほしきは、法を聞くことではあるまいか。

大無量寿經に曰く「不急の事を諍ふ」と。目前のことのみには追はれて、ややもすれば法に遠ざかりゆく我が身が情ない。

人を呪い、世を呪ひ、果しなき暗から暗の世界へと流転を繰り返してゆかねばならぬものであつたのに、やるせない親のることは、それはそれは容易なことではない。

ややもすれば、自己満足の目標を無常なるものの上のみに求める。さればその目標の崩れたとき、満足は變じて不満となり、感謝は變じて呪いとなる。況んや報恩行においておや。私の求めんとする報恩行は、実にみ法を聞き心満たされ、自然に出る感謝の報恩行これなり。

これこそは、いついかなる処でも、ゆるぎない満足を味ふことが出来る唯一の道である。不動の報恩行かな。

私の考へてゐることは最善の事であり、私の行つてゐることは最良の事であると思つて、それ等の最善最良は、実は私の無明の三毒から生れてをり、そして私の都合から割出されてゐることに氣付かずにゐる。本當に皆様方に批判し指導して頂かなければならぬ。

蓮師の御一代聞書に曰く、「何ともして人に直され候ふやうに心中を持つべし。我が心中をば同行の中へ打出しておくべし、下たる人のいふ事をば用ひずして、必ず腹立するなり、淺聞しき事なり。ただ人に直さるるやうに心中を持つべき義に候」

人一倍、我情我見の強い私にとつては、何とした手強い御意見であらう。私は、ただみ親の御名を称へつつ、いよいよみ教を聞かずに居られない。

日々の私の生活において深めらるるは、私といふものもの存

念願にからめとられて、苦しいままに明るく人の世を歩ませて頂くことが出来るとは、何とした任せなことであらう。

希望を持つて輝かしい生活をするのは、実にただ念佛の一道のみと信ずる。

苦しむはこれ人生、悩むはこれ私の姿。

去る夜、ある五六人の若人達とともに雑談の際、突然一人の男が「佛教は何を教へるか」との質問を發した。私は「唯すべてのものはつきりと見ることを教へて下さるのだ」と即答した。

實際、何が難しいといつたところで、もの事をはつきりと見きはめる位難しいことはない。先哲の御苦勞も、全くここにあるのだ。何を見ても自己本位、云ひかへれば、自分の欲や缺陷を土台として見て、それを離れては何ものも見る事が出来ぬのが私の姿だ。

要するに、自分勝手な都合のよい見方をしてゐるのだ。そしてそれが真実の姿だと握る。そこから破綻が生れ、悩みが生れる、もしも、真実の姿を見るならば、決して破綻や悩みが生れることはない筈なのに。

ものをはつきり見ることと一口に云へば至極簡單なやうにも思はれるが、さて実生活の上において、ものをはつきり見在は、多くの人にいかに御迷惑をかけてゐるか知れない事実である。そんな御迷惑をかける位なら、死んだらよからうと云はれても、死ぬ訳にもゆかぬ。一体どうしたらよいのだからうか。

前にも進み得ず、後にも退き得ぬ私の現在の生活である。その動きのとれぬ私に、唯一つの生きる道を教へ給ふみ佛のお慈悲を仰ぎ、至らぬ私の生をして意義あらしめ給ふこと、またなく有難いことだ。

徒然草

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を恋ひ、たれこめて春の行方しらぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしほれたる庭などこそ見どころおほけれ。

是法師は、淨土宗にはちずといへども、学匠をたえず、ただ明暮念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、たのしむ、かなしむ、ゆきかひて、花やかなりしあたりも、人すまぬ野らとなり、かはらぬすみかは人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰と共にか昔をかたらむ。

編集後記

村横浜であります。

花祭が各地に賑やかに行はれてうれしい春となりました。稚児が謹しみ謹しんでみ佛に花を捧げ、「法のみ山の櫻花、昔のままに匂ふなり」と讃佛歌が寂かに聞かれる、何と云う美はしい夢の様な風景でせうか。さうした行事を通じて童心に佛縁が結ばれ、佛心が地に潤うて参ることでありませう。

私も幼い日、祖父に連れられて寺に参り、甘茶を頂いで灌佛し、無心に合掌した楽しい思い出が今尚ほ心に刻まれて居ります。又降魔成道遊された時の佛画がありありと心に残つて居ります。

驚き易い童心に快よく映える花祭の行事は大切に大切に子々孫々に残したいことであります。蒔かぬ種はもとより生をませぬが、地に落ちた種は必ず縁を待つて双葉を出し、花を開き、実を結ぶことであります。

▽「人生の帰趣と現実」の白井先生の御講話中就人立信、就行立信の項は誠に有難い御講話であります。又御自身の求道上の要である「不真面目より外あり様の無い身」の繰り返しての御教は、今回ことに御懇切を極めて下さいました。放縦に流れ易く、或は律法的に墮し易い私共に、兩者の非を明らかにして下さいました。御住所は、広島縣坂局区内坂

▽「聞光録」は清水凡禿居士の信味溢るる実語であります。聞光誌から盛岡市鹿島下四ノ三、長岡高入氏の抄録を頂き続載させて頂きました。次回から「凡禿ノート」として高岡氏の信眼に刻まれた凡禿居士の姿を記載させて頂きます。

▽「人類救済の曙光」は阿闍世王救済の顛末を詳記いたしました。尚ほ親鸞聖人の御心に映える阿闍世王の姿を書き尽くせないままに終りました。いづれ期を見て発表させて頂きませう。

個人の完全なる救済が万人の救済になり、万人の救済が個人の救済となる、これが「他利利己の深淵」にして聖人の遺徳に於けるところであります。我が身を救うて下さる佛様が又一切衆生を救うて下さるのであります。「利他」すなわち他を利すとはひとへに佛様の御力であります。そこは何處までも取り違えてならぬ點であります。佛智徹到するところ、我も救はれ、他も利せられて参ることであります。

斯うした意味を含んで、阿闍世救済の顛末をそのまま人類救済の曙光と題したのであります。願はくば阿闍世の中に自己を発見せられ、自己の中に阿闍世を感得下さるやうに一念じつ筆を擱きます。

慈光第四卷第四号 昭和二十七年四月十五日発行(毎月一回十五日発行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

昭和二十七年四月十日 印刷	昭和二十七年四月十五日 発行	毎月一回十五日発行	定価	一年金二百円(郵税共)	半年金拾七円四角(郵税共)	一部金七円(郵税共)
編集兼 花田正夫	発行人 花田正夫	印刷所 千草印刷所	名古屋市千種区千種町馬走二八	名古屋市千種区千種町馬走二八	名古屋市千種区千種町馬走二八	名古屋市千種区千種町馬走二八
振替口座番号 名古屋一〇四七〇番	発行所 慈光社	一道会館	名古屋市南区駈上町二ノ二八			